

今では欠かせないパートナーです ぎふの農福連携実践事例集



円空サトイモの収穫を終えて

もくじ

もちろん今年も委託しますよ! … 2

せっきーファーム・関谷 英樹さん & ライフスタイルきらら((一社)喜峰寿)

安心して任せています … 4

クリ農家・志津 健さん & ライクサポート(株)ライクサポート)

農福連携で支える円空さといも … 6

中濃里芋生産組合 & それいゆ(株)DAI)

3Kの作業なのに、「楽しい」と言ってくれたんです … 9

トマト農家・鷹見 豪さん & NPO法人ふれあいの家((特非)ふれあいの家)

作業を決め、やり方や分担を決めたら、めちゃくちゃきれいで早い … 12

(株)はしもと農園 & B型事業所わくわく(株)アミークス)

農福連携なんてできるのかが、今ではかけがえのない仲間 … 14

国立大学法人東海国立大学機構 岐阜大学応用生物科学部 附属岐阜フィールド科学教育研究センター 教授 大場 伸哉さん

本文中に出てくる用語について

- 就労継続支援A型事業 … 一般企業等での就労が困難な人に、雇用して就労の機会を提供するとともに、能力等の向上のために必要な訓練を行う
- 就労継続支援B型事業 … 一般企業等での就労が困難な人に、就労の機会を提供するとともに、能力等の向上のために必要な訓練を行う
- 施設外支援 … 企業内等で行われる作業実習等に対する支援
- 施設外就労 … 利用者と職員がユニットを組み、企業等から請け負った作業を当該企業内等で行う支援

※厚生労働省ホームページ等より抜粋



もちろん今年も委託しますよ！

せつきーファーム・関谷英樹さん &
ライフスタイルきらら（一社）喜峰寿）

関谷さんは、県の研修を経て新規就農9年目、瑞穂市内の2.5ヘクタールの圃場で、約500本の富有柿を一人で栽培している。

「地元の名産である『富有柿』でぎふの魅力、農業の魅力を全国にPRしたい」と、洋菓子店・農業高校とのコラボ商品や、地元企業との加工品開発などにも力を注ぐ。

柿の農繁期は、5月の摘蕾作業と、11月上旬から1ヶ月間の収穫作業で、日々の管理作業や、摘蕾作業は一人でもなるとかなるが、収穫作業となるとそうはいかない。

「親戚や友達、知り合い、またその紹介と、本当に苦労して人を集めていました。あてにしているも、急に欠員になってしまい、収穫時期を逃してしまっただけでもありません」と関谷さんは言う。

障がい者施設に作業を委託することになったきっかけは、ぎふアグリチャレンジ支援センターから届いたアンケート。「それまで障がい者との接点はなく、障がい者施設のこと何もしりませんでした。収穫作業を手伝ってもらえ

るなら」と思い「農福連携に興味がある」と回答した「そうだ。」

収穫終盤なら色付きで選別せずに、すべて収穫できるが、ハサミや脚立を使つての作業となる。

受託したのは、就労継続支援B型事業所のライフスタイルきらら。柿の収穫は初めてだが、施設でネギを栽培しており、農家の作業も請け負っていた。ハサミが使える利用者もいた。作業を安全に行うため、脚立は使わず、収穫用コンテナを逆さにして、乗って手の届く範囲までを収穫することにした。

「最初は収穫がスムーズに進む心配でしたが、初日でその心配はなくなりました。」

指示したことは、枝で実をキズ付け



関谷 英樹 さん



実にキズをつけないように、ヘタの付け根で枝を切る

ないようにすること。枝を長めに切って収穫し、ヘタの付け根で枝を切って、コンテナに上向きで実を並べること。コンテナを積んだ時にキズが付かないように実を詰めすぎないことの3点でしたが、ほとんど正確に作業してくれました。

受託したライフスタイルきららのサービス提供責任者・近藤政久さんは、「柿の収穫は初めてで、収穫時期を色で判断すると聞いて不安でしたが、初年度は色付きが早く、『すべて収穫してください』と言われて安心しました。利用者も、青空の下、広い柿畑で作業が出来て『気持ちがいい』と言っていました」と振り返る。

柿畑にはトイレが無いので、施設まで戻ることができる、車で5分の距離も、受託を決めた理由の一つでもある。

約1ヶ月の委託期間が終了するとすぐに、関谷さんは「来年も委託したい」と

と伝えたそうだ。

2年目には、「色味が薄い実は残しておく。熟しすぎている実は下に落としておく」の指示が追加されたが、「初日からほぼ完璧でした」と関谷さんは言う。「多少の色味の差は、自分が後で選別

するので問題ないんです。利用者さんも楽しそうに作業してくれたし、前年と同じ利用者さんもいて、ちゃんと手順を覚えていて。2時間でコンテナ15ケース程収穫してくれました。自分も言い忘れていて、枝ごと切っ

てしまったことがあったんです。多分高い位置の先の方だったので、枝を持って引っ張って切ってしまったんでしょう。枝を切ってしまうと、翌年伸びてこないの切らないように同行している職員さんに伝えると、すぐに改善されました。



一本ずつコンテナに乗って手の届く範囲まで収穫する

関谷さんは、必ず柿畑には顔を出すが、収穫作業をしてもらっている間には、選別や箱詰めなどの出荷調整作業を行う。「自分で収穫してから、作業するのは本当に大変なので、助かっていきます」と言う。昨年、収穫の

約3割をライフスタイルきららが担い、収穫期の大きな戦力となった。「もちろん今年も委託しますよ。そうじゃないと、安心して収穫期を迎えられませんから」と、関谷さんは力を込めた。



上向きに実を並べる
コンテナを積み上げるため、詰めすぎないようにする

取材メモ

関谷英樹さん(本巣市)
品 目：柿(富有柿)
作付面積：2.5ヘクタール 500本
ライフスタイルきらら(瑞穂市)
サービス種別：就労継続支援B型
運営法人：一般社団法人喜峰寿



安心して任せています

クリ農家・志津健さん &
ライクサポート(株)ライクサポート

中津川市福岡、恵那山を望む傾斜地に、

志津さんのクリ園は広がっている。かつては牧草地で、酪農を廃業してから長い間使っていなかった土地、60歳を過ぎてからクリの栽培を始めたそうだ。

「栽培を始めて10年になります。8月下旬から10月初旬にかけて、毎日一定量が収穫できるよう、80アールの樹園地に、8種類、約320本のクリを植えています。知人から栽培管理がしやすいと聞き始めたのですが、5年目の夏の巡回研修で、『クリはよくできているけど、これを何人で収穫するつもり？夫婦2人で？』と問われ絶句しました。クリは拾うだけだから収穫も簡単と思っていたので」と語り始めた志津さん。指摘されて初めて収穫が重労働であると知ったという。

「クリは5m間隔で、日当たりが良い斜面に植えてあります。木の周りに落ちているクリをしゃがんで拾い、立って移動して、しゃがんで拾うの繰り返しです。カゴに入れるクリの重さも堪

えます。

収穫ができるようになったころは、家族に仕事を休んでもらってなんとか収穫できましたが、木が成長して収穫量が増えてくるとそれも難しくなりました。天候にも左右されるので、複数品種の収穫時期が集中してしまうこともありました。手伝ってくれる人を探したものの、自分と同年代の人しかいない。近隣のクリ園が障がい者施設に委託していると聞けば見学にも行きました。

そんなとき、東美濃クリ産地消(商拡大プロジェクトチーム)(J A ひがし



志津 健さん

みの、恵那農林事務所等)の「収穫作業の負担軽減の仕組づくりについて」のアンケートがあり、「障がい者施設と連携したい。イガと実を分けてくれるだけでもいい」と回答したことがきっかけとなり、市内で就労継続支援A型事業所を運営する(株)ライクサポートに声がかかった。

「制度上、利用者に最低賃金の支給が求められています。事業所内作業だけでは容易ではありません。農業には興味がありました。素人で、初期投資も必要なので踏み出せませんでした」と、施設長の瀬藤幸子さん。農業はもちろん農作業の受託も未経験だったが、「とにかくやってみよう。わからないことは教えてもらおう」と受託を決めたそう。

ぎふアグリチャレンジ支援センターと恵那農林事務所の仲介で、志津さんと瀬藤さんが顔を合わせ、初めてでもできそうな作業や労賃などを調整した結果、夏季に生理落果した青イガを拾



作業範囲を指示し、取りこぼしがないか確認

う作業を行うことになった。志津さんは、「青イガ拾いは、害虫の発生を防ぐための作業です。地味な作業ですが、速さより、取りこぼしなく、確実に拾う必要があります」という。イガを突き通さない作業用の手袋は志津さんが用意したが、仕事の出来栄と彼らの工夫に驚いた。

「最初、ちゃんとできるか

心配でしたが、取りこぼしなく、きれいに拾ってくれていて感心しました。何より、作業用手袋をしても、たまにイガが突き抜けることがあるのですが、『こうすると、突き抜けんよ』と、彼らに教えてもらったのが、作業用手袋の下にゴム手袋をつける方法。彼らが、農家の私たちも思いつかなかった工夫を思いつき、安全に作業をしていたのには驚きました。今では、家族も、そうやって安全に作業しています。ちゃんとできるかと思っていたことが恥ずかしかった」とのことです。



実とイガを分けてカゴに入れていく

てにされてうれしい」と喜んでいました」と話してくれた。

夏の作業で確信を得た志津さんは、その年の秋から、収穫作業を委託した。

「最初、筑波という品種の収穫をお願いしました。イガに入ったまま実が落果する品種で、イガの割り方をレクチャーし、イガと実を分け、実は温度が上がらないよう木の下の日陰に置くよう指示しただけ」。落果して24時間放置されたクリは商品にならないということで、取りこぼしは絶対NGですが、自身は選果作業に従事するため、指示だけして園地をあとにしたのだとか。「数人で1日2時間の作業ですが、目標作業量の4、5割は拾ってくれました。取りこぼしはなく、安心して任せています」。

「彼らを障がい者とは思っていません。朝9時半に来て、大きな声であいさつをしてくれます。その日の収穫範囲を指示したら、あとはお任せ。私は選果作業に行きます。選果を終えて園地に行

くと、指示どおり、イガと実の入ったカゴを分け、実はちゃんとクリの木の下に置いてあります。不安は全くありません」。

「他品種の実や、出荷できない実が混じっていても、選果で取り除けるので、あまり気にしません。一般的には、土日の作業に身内が加わるので、月曜日の出荷量突出することが多いのですが、ライクサポートさんの力を借りることで、毎日安定した一定量を出荷できることが何よりです」。利用者や支援員に全幅の信頼を置く志津さんは、今年も収穫期を前に、早々とライクサポートとの打合せを終えた。



指示したとおり実はい陰に置いてある

取材メモ

志津 健さん(中津川市)
品 目:クリ
作付面積:約80アール 320本
ライクサポート(中津川市)
サービス種別:就労継続支援A型
運営法人:株式会社ライクサポート



農福連携で支える円空さといも

中濃里芋生産組合 &
それいゆ(株)DAI)

丸い形が関市ゆかりの円空仏のかしらに似ているとして命名された「円空さといも」は、もっちりとした粘りがあり、煮崩れしにくく味もよいと市場で高い評価を得ているが、生産者は家族経営の農家で、収穫・出荷調整作業が重労働であることから、従事者の高齢化とともに生産農家は減少していた。

その収穫・出荷調整作業を、J Aめぐみのが仲介し、就労継続支援A型事業所のそれいゆが受託することによって、ピーク時には及ばないものの、農家数、作付面積ともに増加させることができた。

サトイモは、株ごと掘り取って収穫する。湿った土にまみれた塊りはおよそ20キログラム、軽トラの荷台に



武藤 保 さん

乗せるにも重労働だ。作業場に運び、芋をはずして乾燥させ、表面の毛羽を取り分けする出荷調整作業が、農家にとって時間も手間もかかる。

「家は稲作農家で、サラリーマン時代から、ずっと作業を手伝ってきました。サラリーマンを辞め家業を本格的に引き継いだ7年前に、冬場の作業としてサトイモ栽培を行うことにしましたが、両親が夜中まで出荷調整作業をしている姿を見ていたので、作付面積を増やす気はありませんでした」と、中濃里芋生産組合長の片桐靖晴さんは話す。

そして、J Aめぐみの中濃営農経済センターの武藤保課長には、常に、どこか出荷調整作業を委託できるところはないかと相談していたそうだ。



片桐 靖晴 さん

一方、それいゆは、障害福祉サービスとしてサツマイモなどの栽培・加工を行っていたが、農業に関わる利用者の冬場の作業がないかと、中濃農林事務所に相談していた。この話を中濃農林事務所がJAめぐみにつないだことが、地域の特産品でありながら生産者の減少に悩んでいた中濃里芋生産組合との出会いのきっかけとなった。

JAめぐみのは、当初から、作業指導、工賃の調整、作業場や毛羽取り機の貸与、農家への発注書の配布などの便宜を図ってきた。

武藤課長は、「作業委託するうえで重要なのは、作業の効率化と双方が納得する工賃です。当初それいゆが提示してきた金額では、利用者に最低賃金を支払うこともできませんでした。利用者の真面目で丁寧な作業を見て、これではいけないと思いました。」

利用者にとって安全な環境で、作業



円空さといも



サトイモの毛羽取り・選別作業。JAめぐみのが冬期で空いていた育苗ハウスと毛羽取り機を貸与している

「調整作業は手間も時間もかかるので、委託出来ないなら、サトイモ栽培を続けるのは難しい」と言う。

数件の農家は、圃場にも、それいゆの利用者を受け入れている。

結婚を機にサラリーマンから就農した森強さんもその一人、夏場のナス栽培の他に、サトイモを90アール栽培している。

「主に妻と母親を入れて3人で作業しています。うちは、収穫後、畑にまわめて貯蔵し、出荷に応じて出荷調整作業をするので、人手は足りていました。それよりも、高齢者や女性にはきつい収穫作業をそれいゆさんをお願いしています。掘り取った株を軽トラックの荷台に載せて、畑内の貯蔵場所に降ろすので、何度も積み下ろししなければなりません。」

「乾燥、毛羽取り、選別作業」の委託からスタート。今では、10軒の農家が委託し、処理量は全生産量の18%、27トンにおよぶ。

農家から聞こえてくるのは、「毛羽の取り残しがなく仕事が丁寧」「調整作業の労力を他に回せるのでありがたい」「作付けを増やしたい」との評判だ。

片桐さんも最初からそれいゆに作業委託している農家の一人。サトイモ栽



森強さん

とも言わず作業してくれま

重いので後で運ぼうと、高齢の母が残しておいた株も、指示など何もしないのに運んでくれました。

最後に、貯蔵したサトイモの山にわらをかぶせ、ブルーシートで被うんですが、一度指示したら次からは言わなくてもやってくれます」。

森さんは11月半ばから約1ヶ月の収穫作業に、利用者3名を1日6時間受け入れている。時間に縛りがあるため、シルバー人材センターにも依頼しているが、能力や適性に差があるのは、障がいのあるなしにかかわらず同じだと言う。

春の植付時期に、作業を頼むこともあるそうで、「急な作業でも引き受けて



中島望さん



株の掘り上げまでは機械でできるが、運搬の積み下ろしは人手に頼る重労働

初めての作業でも、手本を見せればきちんとしてくれます。急な変更や天気によって急がせることは難しいですが、丁寧に作業してくれます。今のところ、雇用は難しいですが、作業を指示して任せたら自分以外の作業ができるので助かっています」と話してくれました。

「農機の運転も刈り払い機もなんでもできます。誠実に働いてくれるので、サトイモだけでなく、水稻にも従事してもらっています。草刈、消毒など、作業は年中あります。

「施設外就労でも施設外支援でも、就労継続支援A型事業所は、利用者に最低賃金を支払わなければならないため、農家との契約は、最低賃金を基本にした時給制になっています。利用者によって能力、作業量が違うので、農業者が納得しない」と難しい。あるところは、作業能力の高い利用者でないと務まりませんが、きちんとできるので時給を上げました。あるところは、単純作業しかなく作業能力の差は気になりませんが、毎年最低賃金の上昇に合わせて上げて良いものかどうか。ハウス内での出荷調整作業の単価も含めて、まだまだ課題はあります」と、武藤課長は言う。



株は湿った土にまみれて約20キログラムもの塊になる

J Aめぐみの主催の就農塾を終了して1年目の兼業農家が、今年度、サトイモの出荷調整作業の全量を委託したという。現在、作業場として貸与している育苗ハウスの設備では、30トンの受託が限界。中濃里芋生産組合の組合員でもあるそれゆいの毛羽取り機の新規取得や乾燥用ハウスの増設などにJ Aめぐみからも支援を行うことによって、受入れ農家も増やせ、利益も上がるのではないかと考えているそうだ。

(株)DAI代表取締役の中島望さんは「サトイモの収穫・出荷調整作業の受託を通して、農家や地域の信頼を得ることができました。休憩のお茶や収穫の打ち上げの食事に誘われたこともあり。利用者には、そういう経験が少ないので、「ありがとう」「助かったよ」「来年も必ず来てね」という一言が、無類の

喜びで自信にもつながります。生産者から声をかけてもらえた、頼りにされた、地域の仲間になれた、それがやりがいになります」と話してくれた。

取材メモ

片桐靖晴さん(関市)
品 目：サトイモ(水稻)
作付面積：約50アール

森強さん(関市)
品 目：サトイモ(テラス)
作付面積：約90アール

それいゆ(関市)
サービスク種別：就労継続支援A型
運営法人：株式会社DAI 他

3Kの作業なのに、 『楽しい』と言ってくれたんです

トマト農家・鷹見 豪たかみさん &
NPO 法人ふれあいの家(特非)ふれあいの家)

「この地域は、昼夜の寒暖差がトマト栽培に適しており、綺麗な水が豊富にあるので、夏秋トマトの生産地です。私を含めて家族経営が多く、収穫作業は

どこの農家でも人手がなくて困っていました。障がい者施設への作業委託は、経験のある知人から、『できる人は十分すぎるほど働いてくれるが、ずっと突っ立っているだけの人もいる』と聞いて

いましたが、ぎふアグリチャレンジ支援センターの『農福連携に関するアンケート』には、それほど深く考えずに『興味がある』と回答しました」という鷹見さんは、現在、中津川市夏秋トマト生産組合長で、東美濃夏秋トマト生産協議会長も務めている。

元々サラリーマンだった鷹見さんの実家は、兼業の稲作農家だったが、農地を守り、地域の特産物を守りたいと、トマト栽培を選択したという。

ぎふアグリチャレンジ支援センター・恵那農林事務所との話し合いで、適期を色で判断する収穫作業は難しいので、未経験でもできそうな仕事ということから、収穫後のハウスの片付け作業を委託することにした。

作業を受託した、NPO 法人ふれあいの家の西尾努事務長は「就労継続支援B型事業所を運営しており、農作業としては養蜂農家のハチミツ採取作業を受託しています。じねんじょの収穫作業を受託したこともあります。いずれは、ハウスを建て、トマトの生産活動をやりたいと考えていました。作業受託を通して、経験から栽培知識を身に着けることにつながるのではないかと考えたそう。それまで、まったく接点のなかった農家と障がい者施設との初めての作業受委託だが、鷹見さんの「まずはやってみましょう」のひとことで、最初の一步を踏み出した。



鷹見 豪 さん

片付け作業は、ハウスから、収穫の終わった株やマルチ、支柱などを撤去する作業で、「これをしないと次の栽培に取り掛かれないとわかっていても、シーズンが終わって気が抜けるというか、テンションが上がらない作業です。ハウスは全部で12棟あり、カビや土ほこりが舞い上がる中、大量の株や資材を撤去し、仕分け、廃棄する作業は大変で、一人で作業すると1ヶ月近くかかります」という鷹見さん、結果には大変満足



支柱を全て抜き、運び出しやすいようにまとめておく

している。

「1日4時間、4人が作業してくれました。1日2、3棟のペースで撤去が進み、廃棄作業を含めて3週間で完了しました。いわゆる3Kの作業で申し訳ないので、作業の合間に利用者をねぎらうと、そんな作業にもかかわらず『楽しい』と言ってくれたんです」。

片付け作業を、同行している職員の指示に従ってテキパキとこなす姿を見つめる鷹見さんは、植えるタイミングが待つ



植穴の横に置かれたポットの向きを変えないように定植していく



阿部 真奈美 さん

たなしで一番手がある定植作業も委託することにした。苗には植える向きがあり経験がないと判断が難しいので、鷹見さんは、事前に植穴を開け、その横に、向きを確認しながらポット苗を置いておいた。

「ある程度の準備をすれば、指示どおり、周りと同じ高さになるように土を調整し、苗を植え、株がまっすぐにできるように定着させてくれました。慣れてくると、苗を置いていくのが追いつかなくなるほどで、助かりました」。

ふれあいの家との連携は、まだまだ



廃棄する実はコンテナで回収し軽トラックに積み込む

可能性を秘めている。「今後は葉かき作業も、やり方を職員さんと相談しながら委託していきたいと考えています。他のトマト農家さんも人手不足で困っています。もっと委託できる障がい者施設が増えて欲しいと思っています」と、鷹見さんは語ってくれた。

鷹見さんの話を聞いて、障がい者施設への作業委託を決めた農家がある。

阿部農園の阿部真奈美さんは、将来的に障がい者雇用を目指したいと考えており、市役所に相談していたという。

「研修会に誘われて鷹見さんのお話を聞きました。株の搬出など1日程度の委託を考えていましたが、ぎふアグリチャレンジ支援センターの説明を聞いて、鷹見さんと同じ作業を委託することにしました。多少不安もありましたが、ふれあいの家の職員さんと事前に詳細な

打ち合わせを行ったことで、安心して作業をお願いすることができました。株が枯れ切っていないので、廃棄する実を取る作業からスタートしましたが、軽トラック一杯分もあり、本当に重労働だったと思います。私と従業員は、並行して行っていたイチゴハウスの建設に専念できて本当に助かりました」。

「雇用と違い、職員さんが同行しているので、伝達もスムーズ、安心感もありました。農福連携の一つの方法として障がい者施設への作業委託は取り組みやすい形だと思えます」という阿部さんは、イチゴのプランターの土入れ作業も委託し、更なる連携を深めている。



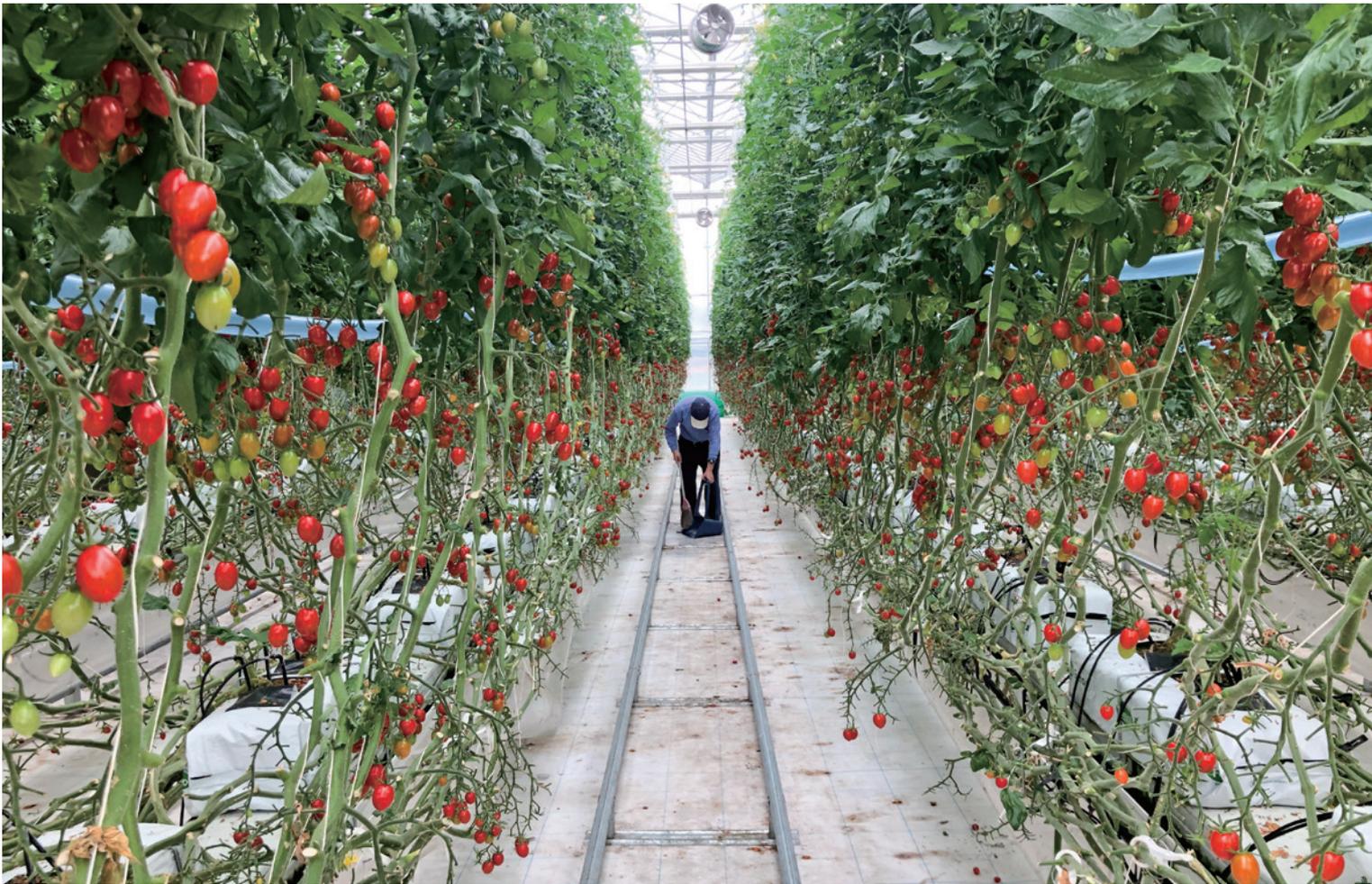
プランターに均等に培地を入れていく

取材メモ

鷹見豪さん(中津川市)
品 目: トマト(麗夏)
作付面積: ハウス12棟(約22アール)

阿部真奈美さん(恵那市)
品 目: トマト(麗夏)、イチゴ 他
作付面積: トマトハウス13棟(約16アール)
イチゴハウス10棟(約22アール)

NPO法人ふれあいの家(恵那市)
サービス種別: 就労継続支援B型
運営法人: 特定非営利活動法人ふれあいの家



作業を決め、やり方や分担を決めたら、 めちやくちゃきれいで早い

(株)はしもと農園&

B型事業所わくわく(株)アミークス

各務原市の田園地帯に、ひとときわ目を引く巨大なオランダ式ハウス。

(株)はしもと農園では、令和2年3月から、就労継続支援B型事業所のわくわくが、ハウス内の清掃を受託している。きっかけは、岐阜農林事務所から渡された、ぎふアグリチャレンジ支援センターの「農福連携に関するアンケート」だった。代表取締役社長の橋本涼さんは、「障がい者施設にパック詰めを委託している知り合いから、丁寧に作業してくれて助かっていると聞いたことがあり、『農作業の一部を委託できる障がい者施設があれば活用したい』にチェックを入れました」と言う。

経営者として、常に作業の最適化を考えていて、「障がい者だからというわけではなく、その作業に合っている人のほうが効率がいいに決まっています。だったら、農作業の一部分を委託するという考えも面白い」と思ったそうだ。

B型事業所わくわくに作業を委託するにあたり、従業員の作業の割り振りを行う北川史子さんは、どんな作業が合っているのかはわからないので、慣

れた従業員も働いている中で、何をしてもらうと助かるかを考えたそうだ。

北川さんが提案した作業は「ハウス内の清掃」。通路や株下に熟して落果した実や葉を掃除する作業で、病気予防のためには欠かせない作業。定期的に従業員が行っていたが、収穫最盛期になると、落果量も増えていき、収穫作業に追われて後回しになっていたそうだ。

B型事業所わくわくと調整し、週2回、職員が同行して4〜5人で作業に当たる。作業時間は、10時30分〜12時00分、1日7〜8列、1ヶ月で全60列を清掃すると決めた。

「作業内容を決めたら、後は、職員さんや利用者さんが、皆で段取りや分担を考えて、手際よく作業してくれたので、



橋本 涼 さん

不安はありませんでした。私は、専用の下駄箱や荷物置き用カートを準備しただけ。専用靴も準備してくれました」。

橋本さんも北川さんも作業の速さ、丁寧さには驚いたという。

「私たちがするより早くてきれい」と従業員も声をそろえる。

天気の良い日は、10分作業するだけで汗だくになってしまふ。効率よく作業できるように、両側から同時に掃き寄せ、回収しやすいように集める場所を数ヶ所にするなどの工夫をして、日を追うごとにスピードアップしていったという。

列ごとに番号が表示されているので、作業範囲が分かりやすく、目標が立て



列の両側から同時に掃き寄せる工夫でスピードアップ

「作業を決めて、やり方や分担を決めたら、めちゃくちゃ早くて、きれいにしてくれて気持ちがいいんです。それに、委託だと職員がいてくださるので、何かあっても安心出来ます。工賃についても、1列400円という出来高制なので、明確でわかりやすいですし、仕事をして、その対価がもらえるという、しっかりとした循環が来ています。農園と

やすい。当日の予定列数が終わると、全員で取り残しがないか確認を行う。作業が終わると、利用者は「楽しかった。次は○曜日だね」と笑顔を見せた。

B型事業所わくわくの生活支援員で、作業に同行する五藤大智さんは「日常、事業所内の作業所で自動車部品のバリ取りを行っている、作業内容は理解しているものの、長時間座って作業することが苦手な利用者もいます。利用者に色々な作業を経験していただきたくて受託することにしました」と言う。

「僕は、常に見ていたわけではないんですけどね」と前置きをして橋本さんは言う。

しては、従業員が、それぞれの作業に集中できるので、結果的に利益につながっていきます。雇用でも委託でも能力に差があっても、自分に合った仕事ができたらいいし、さらに別の作業にチャレンジできる仕組みがあればもっといいと思っています」。

清掃作業を高く評価した橋本さんは、清掃作業に加えて、施設内で作業出来るパックのシール貼りも委託することにした。作業日に受け渡しすることになっているが、時間が無くて用意が出来ず、「今日は渡せない」というと、「やりたかった」と残念そうな顔をする利用者もいる。今後、ハウス内に作業場を整えて、箱折も委託したいと考えているそうだ。

7月、ミニトマトの収穫後の株の片付け時に、全60列を一気に清掃して、今シーズンの作業を終えた。

11月頃には、収穫が再開する。その時はまた、ハウス内で元気に作業する利用者たちが戻ってくる。



パックのシール貼りはシールの位置が指定される



シーズンの締めくくり。株を外した後に、一気に掃き上げていく

取材メモ

株式会社はしもと農園(各務原市)
品 目：ミニトマト(あかね)
作付面積：連棟ハウス(約35アール)
わくわく(各務原市)
サービス種別：就労継続支援B型
運営法人：株式会社アミークス



搾乳担当は、早番や休日出勤も行う

農福連携なんてできるのか？が、 今ではかけがえのない仲間

国立大学法人東海国立大学機構 岐阜大学応用生物科学部
附属岐阜フィールド科学教育研究センター 教授 大場 伸哉さん

岐阜大学応用生物科学部附属岐阜フィールド科学教育研究センターは、8名の障がい者を雇用しており、柳戸キャンパス内にある農場では、乳牛・産卵鶏の飼育、野菜・水稻・果樹・花の栽培など幅広い作業に従事している。身分は毎年契約を更新する非常勤職員で、勤務時間は1日6時間、家族の希望もあって毎日出勤し、午前8時30分から午後4時30分まで勤務している。

「平成16年に現職に就いたのですが、農場の技術職員が削減され慢性的な人手不足。農福連携に取り組んでみたいと考え、あちこち相談してみたものの相手にしてもらえませんでした」。農業は3K、障がい者の親御さんの理解を得ることは難しいのではないかと言われたそうだ。

転職となったのは、平成20年、在学中にも膜下出血で倒れ、高次脳機能障害になった卒業生を紹介されて農場に受け入れたこと。「優秀な人で、昔の記憶がしっかりしています。新しい記憶が維持できないので繰り返し指示する必要があります。草取りから始め



大場 伸哉 さん

ましたが、当初はどう対応していいかわからず手探りでした。雇用は延長できませんでしたが、現在も週に2回、お父さんが付き添い、ボランティアとして働いてくれています」と、大場教授は振り返る。

「本学応用生物科学部は、岐阜高等農林の流れをくむ農学系の学部ですが、いまどき、子どもを『百姓』にしたくて大学に入れる親はいないと、農学部を改称したのが平成16年です。必ずしもみんなが応援してくれるわけではない時代に、障がいのある卒業生を受け入れ、農福連携に取り組むことになったことを機に、この取り組みが正しいことであり、社会的にどういう意味があるのか、国内外を調査することにしました。す

ると、アメリカの『アグリアビリティ』、オランダの『ケアファーム』、イタリアの『農福協同組合』など、日本以上に外国での取り組みが進んでいることがわかりました。ハンデがあっても、危ない作業、3Kの作業にも従事しています。日本流に『危ない仕事をさせてはいけないのでは』と聞くと、スタッフは『危なくても健康者はやっている。ハンデがあるからやらなくてよい、ハンデがないからやってよい』というのは差別ではないか。危険に対して何の手立てもとらないことはない。仕事には何らかのリスクがあり、リスクに応じて報酬をもらう。仕事はそういうものでしょう』という。『それに、事故を起こす原因は機械を止めてから詰まりを取り除くなどの手順を守らないところから起きるもの。障がい者は慎重にマニュアルに



1週間の作業予定が決まっています、指示により適切に収穫していく

ドルが高い作業ですが、現在、3名が搾乳作業を行うことが出来ます。比較的軽度で運転免許を持つている人もいます。小型建機の特別教育を受けてもらって、ホイールローダーを運転して、たい肥を運ぶ作業をしてもらっている人もいます。」

花き担当技術職員
の矢野倫子さんは、「み

従うので案外事故は少ない』という。日本人の向き合い方とずいぶん違うと思えました。」

岐阜大学では、平成20年から特別支援学校のインターンシップを受け入れており、卒業後の雇用につなげている。日常生活に介助が必要なく、自分のことは自分で出来ることが受け入れの条件。農場の技術職員とチームを組んでいろいろな仕事に取り組んでいる。

「農家と違い、単作ではなく複合なので、年中作業があります。最初は米や野菜から始め、適性を見ながら鶏舎、牛舎の作業に進めていきます。酪農は、搾乳していない牛と出産後で抗生剤を打っていて搾乳できない牛を見分ける必要があるし、おなかの下に潜り込んで搾るので、ちゃんと対処できないと事故になることから、農場の中で一番ハー

んな頑張っています。職員としては、その人の特性を見て、何を任せられるかを判断し、その人に合わせてスキルアップさせていきます。刈払機の講習を受け、草刈ができる人もいます。車の免許が取れたら、運搬車の運転もしてもらいます。」

農場としては人手不足の解消という利点があり、障がい者は作業スキルがアップしていく。給料は安いですが、休暇や労働保険などの福利厚生がしっかりした安定した職場で、双方にメリットのあるwin-winの関係になっている。

「こんなことやって大丈夫か、現実に農福連携なんてできるのか」と慎重だった農場職員にとって、農場で働く障がい者は、今ではかけがえのない仲間、必要不可欠のスタッフになっている。



収穫した野菜は、農場内の直売所で販売されている

取材メモ

柳戸農場(岐阜市・8.66ヘクタール)
作業内容: 米、花き、野菜、果樹等の栽培
乳牛(約15頭)、
産鶏卵(約1,500羽)の飼育
障がい者雇用: 7名
美濃加茂農場(美濃加茂市・9.84ヘクタール)
作業内容: 肉牛(100数十頭)の飼育
障がい者雇用: 1名

まず一歩踏み出してみませんか？

農福連携の取り組みに対して、農業経営体からは、「さすがに障がい者に農業は無理」「どんなことができるのか」「接し方がわからない」、障がい者施設からは、「参入したいが農業の知識がない」「資金が必要」などの意見が寄せられます。

作業の細分化、単純化

農作業には、知識と経験が必要ですが、作業を細分化し、単純な作業にまで切り分けてゆくと、障がい者に限らず、経験が浅くても比較的容易に取り組むことができます。

見極めができる

たとえば、「草引き」では、①残さず順序立てて草を引いているかを見ることで、思考・判断力、パターン化していない作業への適応力を、②しゃがみ姿勢で草引きを続けているか、すぐ腰を降ろすかを見ることで、作業負担度の大きい作業に求められる体力があるかを見ることができます。

※農業分野における障害者就労支援 知的障害者と農作業のマッチング・ハンドブック(発行：兵庫県・兵庫県社会福祉事業団総合リハビリテーションセンター能力開発課)から引用。

「障がい者」とひとくくりにはできません。農業経営体の皆さんには、作業委託による受け入れから、障がい者施設の皆さんには、自前での農業経営を考えておられる場合も、まずは作業受託からはじめてみませんか。

ぎふアグリチャレンジ支援センター(農福連携推進室)には、農福連携コーディネーターが常駐し、農業経営体、障害福祉サービス事業所双方の意向を聴き、農作業受・委託のマッチングを行なっています。

また、農業経営体に対して、作業委託などの障がい者の受け入れ体験に対する助成や、障がい者の作業環境改善のための施設・設備の整備助成、障がい者(・施設支援員)との間に入って円滑な取り組みを支援する人材の派遣制度があります。

支援事業

障がい者の受入体験に対する助成

対象 はじめて障がい者を受け入れる*農業経営体 ※障害福祉サービス事業所への作業委託又は雇用

内容 作業委託料又は賃金の一部*を助成。 ※5日以上30日以内、10万円まで

障がい者の作業環境改善のための助成

対象 障がい者を受け入れている農業経営体、障害福祉サービス事業として農業を行う法人

内容 ①機械・器具の購入、機械・施設の簡易な改修にかかる経費の一部*を助成 ※経費の1/2以内、50万円を上限

②資材の購入、機械等の賃借(代耕を含む)にかかる経費の一部*を助成 ※実額、10万円を上限

岐阜県農業ジョブコーチの派遣

対象 障害福祉サービス事業所に作業を委託するか障がい者を雇用する農業経営体

内容 農業者には、障がい者との接し方や作業指示の方法、治具の工夫などを、障がい者本人や障害福祉サービス事業所職員には、作業手順や作業方法などを助言し、農福連携の取り組みが円滑に行われるよう支援する

障がい者農業就労支援サポーターの派遣

対象 農業経営体から農作業を受託又は障害福祉サービス事業として農業に参入する事業所

内容 障害福祉サービス事業所職員と連携して、利用者(障がい者)に作業内容や作業方法を伝え、指導する

助成要件や手続き方法など、詳細はホームページをご覧ください。[URL] <http://www.gifu-notiku.com/>

一般社団法人 岐阜県農畜産公社(ぎふアグリチャレンジ支援センター)農福連携推進室

〒500-8384 岐阜市藪田南 5-14-12 岐阜県シンクタンク庁舎

[TEL] 058-215-1503 [FAX] 058-276-1268 [URL] <http://www.gifu-notiku.com/>